

---

# 皇帝陛下は超ヘタレ

ティシー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

皇帝陛下は超ヘタレ

### 【Nコード】

N0808P

### 【作者名】

ティシー

### 【あらすじ】

突然異世界召喚させられ、最強の力を得た俺は…へ、ヘタレになった！

…冷笑の皇帝？バカ言っな！緊張し過ぎて限界が来ると顔の筋肉が引き攣るだけだ！

…最強の君主？側近のラミュが裏で全部仕切ってるだけだ！

…整い過ぎた顔に甘い声？それは昔からよく言われる！！

周囲から猛烈な勘違いを受け、ただのヘタレは何故か最強の皇帝と

なる。

連載小説名で作った「ファンタジー短編集」へ、この小説を含む全短編小説を移動しました。(2)も短編集に置いてあります。

（前書き）

ま、またまた短編……。いやでもホント、突然浮かんで書きたくなっちゃうんです！

連載小説名で作った「ファンタジー短編集」へ、この小説を含む全短編小説を移動しました。（2）も短編集に置いてあります。

強大な力を誇る大帝国・バージリー二帝国。そして突如君臨した最強にして冷笑の皇帝・レイド。見た目は少女、中身は腹黒魔女・ラミユクリーゼ。二人がタッグを組んだ時、ヘタレは最強となる

「レイド陛下。本日は三国協議がございます」  
「分かった」

皆が息を呑む美しさ。漆黒の髪と切れ目の瞳、低く響く声に、整い過ぎて冷たさすら感じさせる容姿は、神が与えたものだろうと専ら噂になっている。

噂はそれだけではない。

長い歴史を誇るバージリー二帝国で、伝説の英雄とされるレドレルーヌの生まれ変わりであるという説や、一人で国一つを滅ぼしたなど様々だ。

臣下は絶対の信頼を寄せてついていく。まさに理想の皇帝。

・  
・  
・

「とわが国は思う。…レイド殿、それでよろしいかな？」

「異存はない」

「レイド殿、一度わが国へ参らんか？素晴らしいダイヤが出てきて…」

「そういったことは側近に任している。話はラミユクリーゼとしてくれ」

「そ、そうだな。失礼した」

三国の王であるレイド、ジェネバ、ガーセは月に一度行われる三国協議を行っていたが、ジェネバもガーセも、三人の中で一番若いはずのレイドの機嫌を伺っていた。

「そろそろ終わりでいいか？」

それまで無表情だったレイドが微笑する。いや、ジェネバとガーセには絶対零度の笑みに見えたのだろう。二人は慌てて席を立つ。

「ではまた」

颯爽と臣下を引き連れて過ぎ去る後ろ姿は、圧倒的な風格に溢れており、逆らう事を許さない雰囲気醸し出していた。

・  
・  
・

「あゝ！緊張した！！死ぬかと思った！腹っ、腹緩い！どうしょ

「ラミュ！」

「うるさい澪斗<sup>れいど</sup>。トイレへ行けばいいだろう」

「そうだなっ、そうする！」

日常的となった澪斗との騒がしい会話。いや、澪斗が勝手に騒いでいるだけだが。

ラミュクリーゼしか知らない皇帝の秘密。それは、澪斗が異世界人で、超ヘタレということだ。

時遡ること半年前。突然前皇帝が姿を消し、臣下達は混乱に陥った。そんな中、上級の召喚術と能力を開花させる力を持つラミュクリーゼはある一室で異世界からの召喚を試みた。

「【我は容姿と力を備えた英雄の召喚を望む】」

異世界からの召喚なんて、長い時を生きているラミュクリーゼも初めてで、面白半分で行ったことだったが、現れた者は20代前半の容姿端麗な男。

開かれた瞳と視線が合わさった時、ラミュクリーゼは一瞬魅入ってしまった。そして我に返ると気を取り直して膝をつく。

「お待ちしておりました、選ばれし新たな皇帝よ。我が名はラミュクリーゼ。貴方様の右腕となる者でございます」

とりあえず、数秒待つ。しかし何の返答もない。失礼かと思った

が頭を上げてみる。：後悔した。冷たく光る瞳が、自分を見下ろしていた。

だがここで引き下がるわけにもいかない。もう召喚は完了してしまっただ。

「失礼かと思いますが、お名前をお聞きしてもよろしいでしょうか」

次期皇帝と目を合わせながら、内心の動揺を微塵にも出さず堂々と言い放つ。すると、少し経った後。

「…澪斗」

低く、しかしどこか甘く響く声が聞こえた。ラミユクリーゼは歓喜に震えた。この者に仕えられることを、この者の力を今から引き出せることを。

「澪斗様。貴方様は神に選ばれしお方でございます。その貴方様の偉大なる力を、私が開放させていただいてもよろしいでしょうか？」

「……ああ」

「では失礼します」

そう言つと、澪斗の額に触れる。少し揺れた澪斗の体だったが、それから微動だにしなかった。そのことにラミユクリーゼは感心した。

ラミユクリーゼが額に触れたまま何かを呟く。すると澪斗の体から力が迸る。

「なっ、なんだ!？」

皇帝に相応しい容姿、圧倒的な力、風格、ここまでは完璧だった。



ここまでは。

「澪斗様の魔術を開放させていただきました。イメージしていただければ魔法を放てます」

「はい？魔法？……うおっ！なんか使えたあ！！何！？何コレ！！  
恐っ！俺、俺どうしちゃったのオ！？」

ここからが、ラミユクリーゼの苦難の始まりだった。  
なんだかいきなり豹変したように思える次期皇帝。

「落ち着いてください。貴方様の力は強大故」

しかしその後は続かなかった。

窓から澪斗が巨大な魔法を放ったのである。それもガーセが統べる国の城に向かって。

ドゴオオオオン…

「…」

「…」

「…」

「…ど、どうしよう。…え、ちよっ、え？え！？どうちよ…どうしようー！？」

「…あー、大丈夫です。落ち着いてください。たかが旗が折れただけですよ」

「たかが！？え、でもこれ、あれじゃない？開戦とか…」

「いえ、丁度良いです。このごろあの国は調子に乗ってましたし、後処理は任せてください」

「俺…俺処刑とかなんない？！！やばくない！？」

「やばくないです。大丈夫ですよ」

「本当に!!?」  
「本当です」

ラミユクレーゼは密かに頭を抑えた。

確かに無理矢理能力を目覚めさせると性格が変わることはある。  
何故なら奥底に眠っている力を引き出す過程で、余計なものまで引っ張ってることがあるからだ。

しかしまさかだ、まさかこのクールな容姿で、ヘタレも目覚めるとは…ラミユクレーゼも予想していなかった。

「とりあえず、澪斗様には本日より新皇帝となつていただきます」

「え、ムリムリムリ」

「もう決まつた事ですので、さあこちらへ」

「ムリムリムリ。俺難しいこと分かんない」

「大丈夫です。貴方様の無表情の顔でそれらしきことを言っておけば大抵騙されます」

「何!?何を騙すの!??」

「私以外の全員を。皇帝がヘタ…失礼、不慣れな態度ですと臣下にも影響を与えますので、貴方様は凜とした表情を保ってください。よろしいですか?」

「ぜ、善処しまっス!」

ラミユクレーゼは決意した。自分が裏の帝王となろう、と。このヘタレには任せれない。

「ではこれから臣下どもが入ってきますので、澪斗様は堂々とご自分の名と、新たな皇帝であることを告げてください」

「ムリムリムリ!!なんて!?!なんて言えはいっ!?!?あゝ

トイレ！腹イテエ！！」

「…では『我が新皇帝・澪斗である。逆らいし者には死を下す』こんな感じで」

「えええええ！！？」

「良いですね？失敗は許されませんよ」

「も、もし失敗したら？」

「追い出されることになるでしょうね」

「えええええ！！」

「さあそろそろですよ。あとこの部屋以外で叫ばないくださいね。この部屋は防音ですからいいですけど」

内心ラミュークリーゼはとても不安だった。だが…

「俺が新皇帝・澪斗だ」

無表情のまま、全てを平伏させるような声色で澪斗が言い放つ。

「逆らいし者には」

そこまで言うのと澪斗が微笑む。その表情に、ラミュークリーゼを含む臣下全員が見惚れ、同時に背中に走る冷やりとした感覚を感じた。

・  
・  
・

「澪斗様、素晴らしかったです。反対なんて一人も出ませんでしたよ。あの続きを言わなかったのも正解でしたね」

「…」

「澪斗様？」

「ラミュ、だっけ…」

「はい。ラミュクリーゼでございます。好きなように呼びください」

「ラミュ。ヤバイ。出そう」

「はい？」

「ト、トイレエエ！！！」

「…」

## 数分後

「いやあ〜スッキリしたあ〜！」

「はああ…幻想？さっきのは幻想なの？」

「あ、そういやさっきはごめんな！最後まで言わなくて！」

「いえ、先程申しましたように、あそこで止めて良かったかと思いません」

「そう？良かったあ〜！！いやもっただでさえ緊張で筋肉動かないのに言葉発したら限界来ちゃってああなっちゃった」

ああなっただけとは冷笑のことであろうか？…ということは、無表情も冷笑も言葉を切ったのも、全て緊張の所為？

言わなかったのではなく、言えなかった？無表情を作ってたのではなくて、笑顔を作れなかった？で、限界が来た結果、冷笑…？

わ、笑えねえ！！大丈夫か！？これで？！この先やっていけるか！！？

いやでも、裏で上手く操作すれば…。そうだ、私がしっかりしていれば問題ない。本人は緊張すると自動無表情機になるみたいだし、幸いこの顔で、威圧感は本人がピンチになると出るみたいだし、基本無口で、冷笑は終わりの合図という暗黙の了解を作れば…美形で、冷酷な皇帝の出来上がり！…いける！ハズ。

・  
・  
・

それから半年。ラミユクリーゼが願ったとおりの理想の皇帝像が噂で広まり、他国は澪斗の力を相当重く見たらしくこっちの意のままであった。

「なあなあラミユ〜！」

「何？」

「あの三国なんちゃら無くせな〜い？」

「ムリ」

「即答オ！？」

「当たり前だ。いいじゃん別に。座って相槌打ってるだけじゃん」

「違い！あの二人の威圧感すごいんだぞ！？」

「澪斗の方が威圧感すごいと思うけど…」

「え？なんか言った？」

「いや？単にヘタレだなって思っただけ」

「ラミユって酷いよなあ！？見た目天使っぽいくせに中身悪魔だろ！」

「澪斗のが酷いよ？理想を裏切るという意味で。失望感半端ないか

らね、そのヘタレ。ホントに人は見かけによらないよね」  
「うっせ。好きでヘタレなわけじゃねエ」

ヘタレは認めるのか。

澪斗がこの世界へ来て三日目から私は澪斗と二人の時は敬語を使わなくなった。澪斗もそれを望んだし、私も面倒臭かったし。

こんな頼りない皇帝はどこを探してもコイツしかいないだろう。

「あ、澪斗。見合いの話来てたよ」

「はあ!？」

「まあ当たり前だね。むしろ遅いくらい。どうする?」

「いやいやどうするもこうするも俺やだよ」

「多分これからドンドン来るよ」

「マジで?」

「マジで。どうする? 適当に王妃作っちゃう?」

「何その適当。俺の正体バレていいの?」

「うっんだメ。誰か一人にでもバレたら生涯終わると思った方がいいよ」

「俺おまえに会った時点で人生終わってるんじゃない」

「なにか?」

「いえなにも」

「あ、私と結婚する?」

「は?」

「うん、この方法もありだね」

「全然アリじゃねエよ。妻に尻敷かれるのは流石に避けたいんだけど」

「誰と結婚してもそのヘタレじゃ未来は見えてるんじゃない?」  
「...」

新たな皇帝が君臨してから早半年。

致命的な秘密を持つ皇帝レイドはそれでも日々を一生懸命に生きている。

「そう…ヘタレな皇帝とは俺のことだ!!」

「自慢気に言ってるじゃねエーよ」

(後書き)

ありがとうございました！

なんか変なシリーズが増えていきそうなの…。

今度漑斗視点を書くような書かないような。あ、漑斗の「斗」が「ど」ってムリじゃね！？とか寛大なお心でスルーをお願いしますw



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0808p/>

---

皇帝陛下は超ヘタレ

2011年5月27日19時05分発行